質問

相談した後でフォローアップ(事後指導)があった

結果と考察

	はい	どちらでもない	いいえ
A	24(41%)	32(55%)	2(3%)
B	7(21%)	26(79%)	0(0%)
C	13(25%)	38(75%)	0(0%)
全体	44(31%)	96(68%)	2(1%)

n=142

相談をしたのちに、さらにフォローアップがあったかという問いでは、やはりAセンターが他のセンターに比して「はい」と回答する利用者が多く見られた。相談が一過性のものにおわるのではなく、担当者が常に相談者のことを気にかけているという姿勢を示すことは、育児不安やストレスに対する大きなソーシャルサポートとして有効な手段であり、フォローアップは担当者に必用とされる業務であろう。

9. 子育てサークル支援について

(1)子育てサークルの情報提供について

質問

子育てサークルについての情報提供があった

結果と考察

	はい	どちらでもない	いいえ
A	17(29%)	32(55%)	9(16%)
B	22(67%)	10(30%)	1(3%)
C	33(65%)	16(31%)	2(4%)
全体	72(51%)	58(41%)	12(8%)

n=142

Aセンターが育児相談に関して非常に秀逸なセンターであるとすれば、BセンターならびにCセンターは、育児サークルに関する情報について詳しく、またその情報を適切に利用者に提示できるセンターであるといえよう。育児サークルに関する情報提供とサークル育成は、育児相談と並び支援センターの重要な業務であり、その点Aセンターは、育児サークルについての情報提供をもっと積極的に行う必要があるだろう。

(2)子育てサークルへの入会の参考

質問

子育てサークルに入会する上で参考になった

結果と考察

	はい	どちらでもない	いいえ
A	16(28%)	33(57%)	9(16%)
B	10(30%)	21(64%)	2(6%)
C	18(35%)	31(61%)	2(4%)
全体	44(31%)	85(60%)	13(9%)

n=142

支援センターの情報をどこで得るかという先の質問の回答として、育児サークルとする回答が少なかったことと同様に、支援センターの利用者が、子育てサークルに入会することの情報をあまり参考としていないことが示唆された。

(3)子育てサークル作成への参考

質問

子育てサークルを作るうえで参考になった

結果と考察

	はい	どちらでもない	いいえ
A	10(17%)	38(66%)	10(17%)
B	5(15%)	26(79%)	2(6%)
C	10(20%)	38(75%)	3(6%)
全体	25(18%)	102(72%)	15(11%)

n=142

支援センターを利用することで、子育てサークル作成に有効な情報や支援を得たという回答は、ほとんどみられなかった。大阪の十三の子育て支援センターは、利用者たちをまとめてサークルとし、何回かのセンター利用を経て、サークルとして独立させ、以後自立して管理運営をさせるという方針をとっている。このような、方式では、支援センターは、サークルとより密接な関係を持ち地域全体で子育てを支援するという動きにつながっている。これに対し、東広島市の子育て支援事業は、育児サークルとは無縁に活動しており、今後の子育て支援を考える上で、協調することも必用かもしれない。

Ⅳ. 結論

(1)子育て支援センター利用者について

センター利用者は、30歳代前半中心の子育て世代の母親であった。年齢層はセンターごとに特色がでていたがこれは、それぞれが抱える団地や居住地の年齢構成の影響が大きいものと考えられる。特に高美が丘地区は、幼児から学齢児まで幅の広い年齢層がいて、車を所有し、遠方の子育て支援センターへの利用も多くみられたが、同世代の子育て家庭が老齢化していくことを考えると、この地区や近隣の地区では、将来的な利用の増加はみられないと考えられよう。またアンケートに回答した利用者の半分近くが重複利用者であった。東広島市の各地域をカバーできるように計画配置された子育て支援センターだが、車の利用者にとっては、それはあまり意味をなさない。むしろ、車所有者への子育て支援と持っていない者への子育て支援の二極化を生じさせているとの懸念もぬぐいきれない。特にAセンターのような大規模施設ではでは利用者がパンク状態であり、性急な解決が望まれるところである。

(2)子育て支援センターの運営について

BセンターならびにCセンターが、センターの参加予約がしやすいと回答する割合が8割を超えているのに対して、Aセンターは「はい」と回答した割合は5割をきっていた。センター開催回数、問い合わせについても、Aセンターについては、シビアな回答が少なくなかった。これは後でも触れるが、大規模子育て支援センターの宿命ともいえるところであろう。またAセンターが他のセンターよりも2年以上前に開設されたこと、そして利用者も登録者数だけでゆうに200件を越えているなどの違いにも起因している。

同様に時勢を反映してか、利用に対する支出に関しては、利用者は厳しく、Aセンター以外の2つのセンターは、利用料金が適切であるという回答した利用者は9割を占めた。各センターともに、支援センターの利用料金はおやつ代の実費の100円で同一であるが、Aセンターは加えて注射料金を100円徴収している。これがAセンターの料金に対する利用者の意見として「はい」の割合が低かったことに影響しているのかもしれない。これも大規模センターの特徴といえよう。特に参加人数の多いAセンターでは、人数調整を様々なかたちで試行しているが、多くの利用者は、子ども間の異年齢での遊びや活動を望んでおり、センターの利用日を、子どもの年齢で分けたほうがよいと考える利用者は、1割程度とそれほど多くはなかった。現在、AセンターならびにCセンターは、提供するサービス内容が0歳から5歳まで同一ではすべての子どもにも親に満足なサービスが提供できないということから、日によって0-1歳児専用の利用日を設けたり、3歳以上・未満で利用日を分けたりしている。しかし、この設問の回答からは、年齢による利用日を分けることを利用者はそれほど望んでいないことがここからもわかる。それよりも、とにかく利用できる回数が多いことを重視した結果を反映しているのではないかと推測される。多くの利用者は、こまめにセンターの配布する印刷物を読んでいることがわかった。

(3)施設環境について

多くの利用者は施設環境について不満が少ないことがうかがえた。ただセンター自体の位置については現在の3センターの所在地が、利用上便利であるとは言い切れないことを示唆していると言えよう。これは、適正配置調査にも示されている。また、利用者に志和地域の人がいなかったが、現在よりも、支援センターを増やし、各地に分散させることで、地域間で利用上の不便さが生じないようにすることが必要であろう。

センターの玩具、センターの外観、清潔についてはもっとも規模の小さいセンターで高評価であったことが特徴的であった。また同センターは、子供の活動スペース、親の休憩スペースについても満足度が高く、子育て中の親は、広々とした空間よりはいわばコージーな空間を求めていることがわかる。特に子育て支援センターにおいて親の休憩という発想は、支援者側にはほとんどないと考えられる。今後このような観点が新たなセンターには望まれよう。

(4)人的環境について

Aセンターは、専属の担当者が3名、BセンターとCセンターでは各1名の担当者がいる。しかし、Bセンターを除き、担当者の人数を適切だと考える利用者は、7割程度と高くない。これは、単に担当者の数とサービス提供の内容が比例しないことを意味している。つまり人数や人的位置よりも活動の内容の満足度との関係を見る必要がある。　その意味においても、ここでも大・中規模センターと小規模センターとの特徴がでてい

た。利用者は比較的小さい集団で、なおかつあまり広くないスペースで、個別的な支援を望んでいることが浮き彫りにされた。担当者は子どもにとって親しみやすいかという問いについては、「はい」と回答する利用者がほぼ9割を占めていたことから、どの園とも適切な保育者をセンター担当にすえていることが分かる。事実各センターの担当者は、ベテラン保育者が任用されている。

(5)支援内容について

支援内容を観察から類推すると、Cセンターは幼稚園保育園の子ども集団や保育ということを意識している一方で、A, Bセンターでは子どもの自由な探索的な遊び活動を重視している。このような考え方も、支援内容に反映しており、利用者の意識にも表れていた。数年後の子どもの集団保育への参加(具体的には幼稚園保育所への入園)という意識からか、「身体活動が十分」「年齢発達にふさわしい活動」「他児との関わり・集団遊び」という項目でCセンターが高く、次回の開催を「子どもが楽しみにしている」よりも「親が楽しみにしている」という評価であった。子育て支援は、さまざまな形態やさまざまなニーズに支えられて実施されるべきで画一的な方法でするのは望ましくない。この意味でこのような支援内容に多様性があることは望ましいことであると考える。

(5)お子さんについて・あなたについて

サービス受給者が実際どれほどの満足を得られていたのかをこれでみることができる。概して子どもの満足よりも、親の「リフレッシュ」「知識増大」「育児ストレス軽減」に効果があるとの回答が多い一方で、子ども自身の成長には直接結びつかないと考えている親が少なくないことがわかった。特徴的なのはAセンターの利用者の中で、「子どもの家での遊びが変わった」と評価している母親の多かったことである。これについて、どのように変わったのか興味のあるところであり、今後の分析が必要となろう。

多くの母親はやはり、子どものことも大切だが、自分のリフレッシュ、話し相手を捜しにきているというところが本音のようである。ただ支援センターに通っていることで夫婦間の話題が増えたかという問いには、40%の家庭でしか肯定的な回答が得られなかった。

(6)子育て相談について

子育て支援センターの機能として、育児相談業務があるが、この方面での力の入れようが各センターで異なることが本設問より明らかにされた。先述したように、Aセンターは、特に育児相談に力を入れており、電話相談も数多くこなしている。このあたりがデータとして差がでた理由であろう。ただし、支援センターを利用できるという母親は、誰にも相談できずに困って家からも出られず悩む親に比べれば、それほど悩みが深刻ではないのではないだろうか。開かれた相談機関として、雰囲気作りは重要であろう。 支援センターで育児に関する相談をすることで、悩みが解決できたかという問いに対しては、Aセンターが他のセンターよりも「はい」という回答が多かった。これは、先に述べているように、相談機関としての位置づけが明確になされていることによるのであろう。なお、全体的に「どちらでもない」とする利用者が多かったのは、相談することがなかったため、本設問に対して回答の使用がなかったことによると考えられる。特にAセンターでは、プライバシーに対する配慮、その後のフォローアップ体制もできており利用者の満足度は高いようであった。

(7)サークル情報について

子育てサークルについて、それぞれのセンターでは、それほど高い数値がでていなかった。今後の課題となろう。

(8)地域子育て支援センターに対する利用者評価としての項目の妥当性について

子育て支援センターの施設、運営、支援内容、人的環境に関しては、対象とした3つの園について、それぞれの特徴を反映したものが回答として得られたため、これらが子育て支援センター評価の項目として妥当なものと考えられる。ただ子どもへの影響、母親自身の影響について大きな違いが見られず、「どちらでもない」というような回答が多かった。また子育て支援センターの主業務と考えられている子育て相談に関しても、それほど有効性があると評価している利用者は、想像以上に少なかった。またサークル情報について積極的におこなわれているとは言い難い状態であった。以上のことより子育て支援センターの施設、運営、支援内容、人的環境に関しては、評価項目としては妥当なものといえよう。

資料　子育て支援センター評価アンケート

A保育園の子育て支援センターを利用されるお母さんへのアンケート

この調査は、子育て支援センターの利用状況を明らかにすることを目的としています。またこの結果は、行政、保育所などの支援機関、大学からなる東広島「子育て支援」連絡協議会において、今後の東広島市の子育て環境の向上を検討していく上での基礎的資料となります。お忙しいところ、お手数をおかけして申し訳ございませんが、上記の点をご理解いただき、どうぞお考えのままにお答えくださるよう、お願い申し上げます。

なお、アンケートは無記名でおこない、データはすべて統計的な処理をおこないますので、皆さんのプライバシーなどにご迷惑をおかけすることはありません。

この調査についてのお問い合わせは下記のところまでお願いいたします。

東広島「子育て支援」連絡協議会　事務局　七木田　敦・水内　豊和

※アンケートは両面あります。
※各支援センターについてそれぞれ調査をおこなっていますので、申し訳ございませんが他の支援センターですでにこのアンケートに回答済みの方も、本調査へご協力お願いします。
※回答は、記述を求める設問を除いて、特に指示のない限り、あてはまるものに1つ○をつけてください。

1. お母さん（記入者）の年齢を教えてください。
①20歳未満　②20～24歳　③25～29歳　④30～34歳　⑤35～39歳　⑥40～44歳　⑦45歳以上

2. お住まいを教えてください。できれば大字（おおあざ）・だいたいの丁目までご記入ください（例：中央5丁目／寺家18XXなど）
町　　名：　①西条町　②高屋町　③八本松町　④志和町　⑤その他（　　）
大字・丁目：　（　　）←おおまかで結構です

3. お母さんの職業形態について教えてください。
①フルタイム　②パートタイム　③専業主婦　④その他（　　）

4. 祖父母（両方、または一方）との同居について教えてください。
①同居している　②同居していない　③同居していないが市内にいる

5. お子さんの人数を教えてください。
①１人　②２人　③３人　④４人以上

6. お子さんの年齢を教えてください。お子さんが2人以上の場合、もっとも小さいお子さんをお答えください。
①0歳　②1歳　③2歳　④3歳　⑤4歳　⑥5歳　⑦6歳以上

7. 他のセンターも含めて子育て支援センターをおおよそどれぐらい利用されていますか。
①週に2～3回程度　②週に1回　③月に2～3回程度　④月に1回　⑤その他（　　）

8. 当センターの他にはどの子育て支援センターを利用していますか（複数回答可）。
①B保育園の支援センター　②C保育園の支援センター　③その他（　　）

9. この子育て支援センターの情報はどこで入手されましたか（複数回答可）。
①子育てサークル　②口コミ　③他の子育て支援センター　④公園　⑤図書館　⑥公民館　⑦幼児教室
⑧育児雑誌　⑨インターネット　⑩電子メール　⑪テレビ・ラジオ　⑫広報「東広島」　⑬新聞
⑭リビング／プレスネット　⑮子どものきょうだいのつながり　⑯その他（　　）

※アンケートは中面に続きます。

☆A保育園の子育て支援センター（以下センター）についておうかがいします。
☆以下の質問のそれぞれについて、「はい」「どちらでもない」「いいえ」のうちから、あなたのお考えにあてはまるものいずれか1つに○をしてください。

例）子育て支援センターをこれからも利用したい　　はい／どちらでもない／いいえ

Ⅰ．全体的な運営について

1. センターの実施の回数は適切である　はい／どちらでもない／いいえ
2. センターの参加予約はしやすい　はい／どちらでもない／いいえ
3. センターへの問い合わせの際の対応は適切である　はい／どちらでもない／いいえ
4. センターではさまざまな子育てに関する情報が手に入れやすい　はい／どちらでもない／いいえ
5. センター主催の講演会や催しは子育てに役だつ　はい／どちらでもない／いいえ
6. 利用料金はセンターの支援内容に対して適切である　はい／どちらでもない／いいえ
7. 参加者の人数は妥当である　はい／どちらでもない／いいえ
8. 子どもの年齢別で実施する必要がある　はい／どちらでもない／いいえ
9. 参加者が準備しなければならないものが負担に感じる　はい／どちらでもない／いいえ
10. 初回登録がわずらわしい　はい／どちらでもない／いいえ
11. センターの配布するたよりなどは読んでいる　はい／どちらでもない／いいえ

上記質問の回答について理由や意見があればご自由にお書きください。

Ⅱ．施設環境について

1. センターの場所は、あなたの生活環境の上で便利である　はい／どちらでもない／いいえ
2. 駐車場は利用しやすい　はい／どちらでもない／いいえ
3. センター内の玩具・遊具は十分である　はい／どちらでもない／いいえ
4. センターの外装・内装は好ましい　はい／どちらでもない／いいえ
5. センターは衛生的で清潔である　はい／どちらでもない／いいえ
6. センターでは自然とのふれあいに気が配られている　はい／どちらでもない／いいえ
7. 子どもの休憩スペースは使いやすい　はい／どちらでもない／いいえ
8. 親の休憩スペースは使いやすい　はい／どちらでもない／いいえ
9. トイレ、授乳／おむつ交換コーナーは使いやすい　はい／どちらでもない／いいえ
10. ベビーカーで入構しやすい　はい／どちらでもない／いいえ
11. 危険なものや場所についての配慮が適切である　はい／どちらでもない／いいえ

上記質問の回答について理由や意見があればご自由にお書きください。

Ⅲ. 人的環境について

1. 担当者の人数は適切である　はい／どちらでもない／いいえ
2. 担当者の子どもへの関心・気配りは適切である　はい／どちらでもない／いいえ
3. 担当者は年齢や発達に応じた働きかけをしている　はい／どちらでもない／いいえ
4. 担当者は個々の子どもに応じた働きかけを心がけている　はい／どちらでもない／いいえ
5. 担当者の服装・身なりは子育て支援にかかわるものとしてふさわしい　はい／どちらでもない／いいえ
6. 担当者は子どもにとって親しみやすい　はい／どちらでもない／いいえ
7. 担当者はあなたにとって親しみやすい　はい／どちらでもない／いいえ
8. 担当者・職員間で子どもやあなたへの対応姿勢に一貫性がある　はい／どちらでもない／いいえ
9. 担当者の子ども間のトラブルへの対応は適切である　はい／どちらでもない／いいえ

上記質問の回答について理由や意見があればご自由にお書きください。

Ⅳ. 支援内容について

1. センターでの一日のスケジュールは適切である　はい／どちらでもない／いいえ
2. おやつは質・量ともに適切である　はい／どちらでもない／いいえ
3. 身体活動が十分にできる内容である　はい／どちらでもない／いいえ
4. 年齢・発達にふさわしい活動である　はい／どちらでもない／いいえ
5. 集団遊び・他児とのかかわりに配慮されている　はい／どちらでもない／いいえ
6. 次回利用を子どもが楽しみにしている　はい／どちらでもない／いいえ
7. 次回利用を親が楽しみにしている　はい／どちらでもない／いいえ
8. 親同士のコミュニケーションができる環境・内容である　はい／どちらでもない／いいえ

上記質問の回答について理由や意見があればご自由にお書きください。

Ⅴ. お子さんについて

1. 子どもは生活習慣（手洗い、トイレなど）が身に付いた　はい／どちらでもない／いいえ
2. 子どもはやる気・意欲が育った　はい／どちらでもない／いいえ
3. 子どもは他児や担当者とのかかわりの中で社会性が身に付いた　はい／どちらでもない／いいえ
4. 子どもの健康増進につながった　はい／どちらでもない／いいえ
5. 子どもは同年齢の友達が増えた　はい／どちらでもない／いいえ
6. 家庭での遊びかたが変わった　はい／どちらでもない／いいえ

上記質問の回答について理由や意見があればご自由にお書きください。

※裏面に続きます。

Ⅵ. お母さんについて

はい／どちらでもない／いいえ

1. 育児負担が軽減された　はい／どちらでもない／いいえ
2. 育児の方法について知識が増えた　はい／どちらでもない／いいえ
3. 心身共にリフレッシュすることができた　はい／どちらでもない／いいえ
4. あなたの友達が増えた　はい／どちらでもない／いいえ
5. センターへの参加は幼稚園・保育園の入園への判断に影響を与える　はい／どちらでもない／いいえ
6. 育児不安が軽減された　はい／どちらでもない／いいえ
7. 夫婦間で子育てに関する話題が増えた

上記質問の回答について理由や意見があればご自由にお書きください。

Ⅶ. 子育て相談について

1. 相談しやすい雰囲気である　はい／どちらでもない／いいえ
2. 相談して悩みは解決できた　はい／どちらでもない／いいえ
3. プライバシーに対する配慮は適切である　はい／どちらでもない／いいえ
4. 相談した後でフォローアップ（事後指導）があった　はい／どちらでもない／いいえ

上記質問の回答について理由や意見があればご自由にお書きください。

Ⅷ. 子育てサークル支援について

1. 子育てサークルについての情報提供があった　はい／どちらでもない／いいえ
2. 子育てサークルに入会する上で参考になった　はい／どちらでもない／いいえ
3. 子育てサークルを作るうえで参考になった　はい／どちらでもない／いいえ

上記質問の回答について理由や意見があればご自由にお書きください。

Ⅸ. その他

A保育園の子育て支援センターに関するご意見・ご要望があれば、ご自由にお書きください。

これで質問は終わりです。ご協力ありがとうございました。

F.研究発表

1.論文発表

東広島市における地域子育て支援センターの評価に関する研究　研究年報(広島大学大学院教育学研究科附属幼年教育研究施設)　2003　(予定)

地域子育て支援センターの評価に関する研究　2003　日本保育学会　(投稿中)

2. 学会発表

地域子育て支援センターの評価に関する指標の妥当性について　2003　日本小児保健学会(鹿児島大学)　発表予定

G.知的所有権の取得状況

なし

厚生労働科学研究費補助金（子ども家庭総合研究事業）
「インターネット及び人的ネットワークを活用した育児不安軽減に関する研究」
分担研究報告書

地方自治体における子育ての実情と家族支援
－山形県西川町の子育てと保育園に関する調査から－

分担研究者　　佐藤智美（聖徳大学）
山村　滋（大学入試センター）

研究要旨

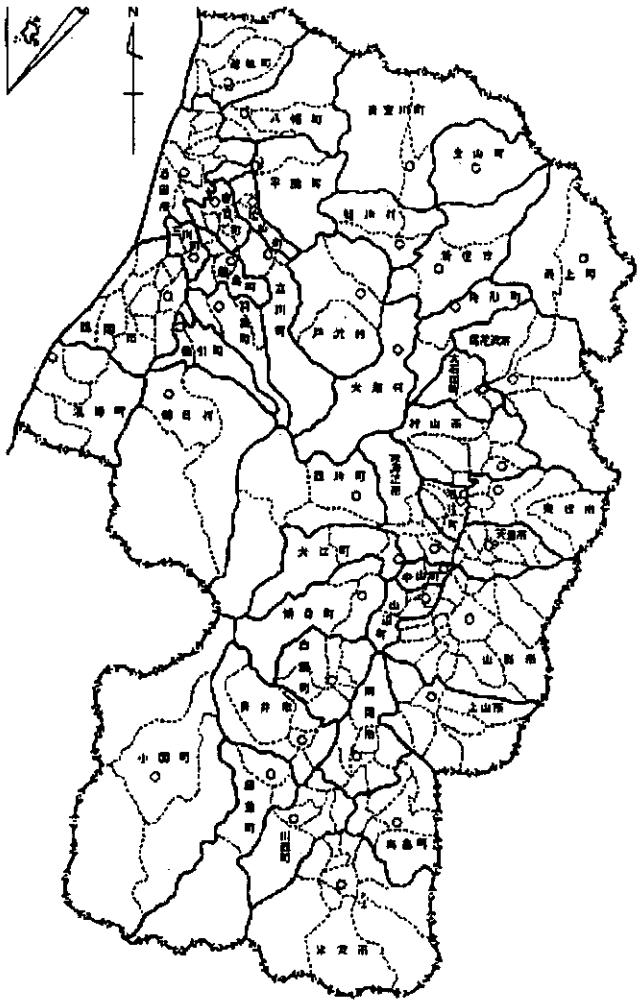
面積の95%が山地で国の特別豪雪地帯に指定されていて、若年層の流出、集落のダム水没などにより1970年には過疎地域に指定され、65歳以上の高齢者人口が33%と高齢化が進んでいる山形県西川町における子育ての実情と家族支援の調査を実施した。西川町では少子化により保育園、小学校、中学校が統廃合され、さらに全ての児童館が休館という状況を受け、町が育児支援の施策、すなわち子育て支援の基盤整備、母子保健体制を充実、保育園等の適正配置、子育てネットワークの整備を進めている。具体的には、全保育園を統合し新しい保育園を建設、保育年齢と時間を延長、保育園の一画に子育て支援センターを併設、育児講座・子育て相談・情報提供を実施、マタニティスクール、各種検診・予防接種、母親学級のほかに「孫育て学級」の実施である。西川町の女子労働力率は県下、全国的にも高く、また一般に低下する20歳代後半から30歳代も低下しない特徴がある。これは配偶者の親との同居率が高く、日常的な育児の主役を配偶者の親が担当する伝統があることによる。

第1節　西川町の概況

1. 西川町の地勢

西川町は山形県の中央に位置しており、1954年4村が合併して町制を施行し現在に至っている。磐梯朝日国立公園に属する朝日連峰と月山に囲まれた自然と、それを源とする水資源に恵まれた町である。山形県村山地方の広域を占める町の総面積は393.23㎢で、県に44ある市町村の中でも4番目の広さである。その面積の95%が山地で占められ、平地は町を流れる寒河江川沿いとその支流沿いにわずかに広がっており、可住地面積は13.53㎢で、総面積の3.4%にすぎない。気候は、国の特別豪雪地帯の1つに指定されていることからも分かるように、冬は厳しく、積雪は多いところで5m前後にもなる。

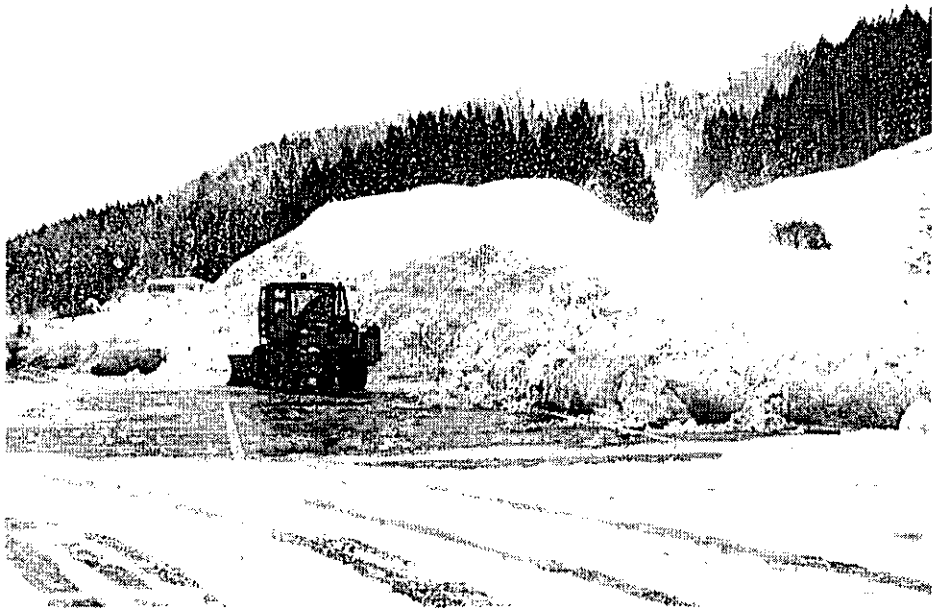
2002年3月現在、西川町の集落数は53、人口は7474人、世帯数は2028である。65歳以上の高齢者人口は2447人で、その割合は32.7%と山形県内では最も高い。町の人口は、ピーク時には15000人を超えたこともあったが、高度経済成長期における若年層の人口流出、ダム建設による集落の水没などを経験し、人口は減少の一途をたどっている。人口の減少



はこの町に過疎化を引き起こし、1970 年には過疎地域の指定を受けた。過疎対策はこの町の大きな課題の一つとなっている。町では、1985 年以降、高齢化の問題に本格的に取り組み始め、町の施設福祉の要としてケアハイツ西川が建設され、サービスが開始されると、全国の市町村から、視察者、団体が多数おとずれるところとなり、そのサービス体制が注目された。

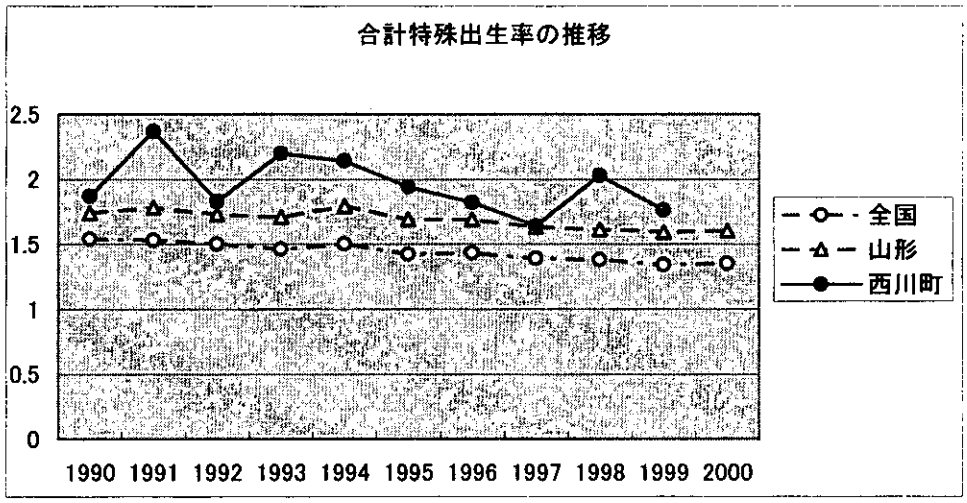
2000 年の国勢調査の結果から就業構造を見てみると、第一次産業に就業する人口は 10.6%で、40 年近く前には 50%以上が第一次産業に従事していたことと比較すると、減少は著しい。また、第二次産業、第三次産業の就業人口の割合はそれぞれ 39.6%、49.8%となっており、1995 年の国勢調査結果よりも第一次産業、第二次産業の就業人口が減少し、第三次産業に就業する人口の割合が増加した。

広域にわたっている町の 50 以上の集落を 1977 年以来町営バスが走り、交通機関のない集落の利便性の向上に貢献している。バスは現在や路線で、役場、病院、保育園、学校、などの町の中心部には必ず停まり、住民の主要な交通手段となっている。2000 年度からバス料金が改定され、中学生までを無料化し、大人料金も 200 円に一律化されたため利用者は増加している。



2．少子化

まず、合計特殊出生率を見てみると、図 2-1-1 に示したように、西川町は全国や山形県よりも一貫して高いのが分かる。



しかしながら、現実には出生する実数は少なく、町の大きな問題の一つとなっている。西川町の出生数は、1960 年には 246 人であったのが、1985 年以降には年間 100 人を下回るようになり、1996 年には 60 人を割り、65 歳以上の老年人口が 15 歳未満の年少人口を上回った。さらに出生数は 2000 年には 50 人を下回り、2001 年には 40 人となっている。「平成 10 年山形県の人口と世帯数」によると、西川町は山形県内で最も年少人口の割合が低くなっている。少子化は保育園、小学校、中学校などの統廃合の問題に関わり、子どもを持つ

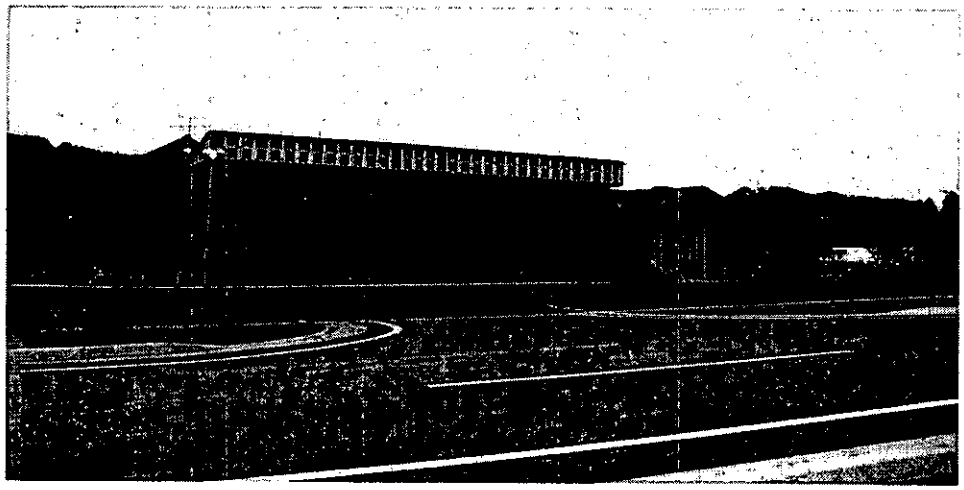
親の重大な関心事となっている。

西川町では、このような出生数の減少は子どもが育つ環境にも影を落とすことになるとし、住民のニーズを捉えて、子育て支援の総合的、計画的な施策を進めるために、1998 年に「西川町わんぱくプラン」を策定した。このプランでは、(1) 社会全体での子育て支援、(2) 家庭での子育て支援、(3) 保育環境整備と支援に策定視点を置き、2005 年度を目標にして、それぞれの支援にむけた具体的な内容が記されている。特に、これらの中でも、当面する課題として、①子育て支援センター整備に向けた検討と基盤整備、②母子保健体制の充実、③保育園等の適正配置、④子育てネットワークの整備が挙げられている。これらは住民からの要望も多く、緊急に取り組む必要性のある課題であり、保育園の統廃合、新しい保育園の設置、開園の過程の中で、徐々に実現化されつつある。

3．子育て環境

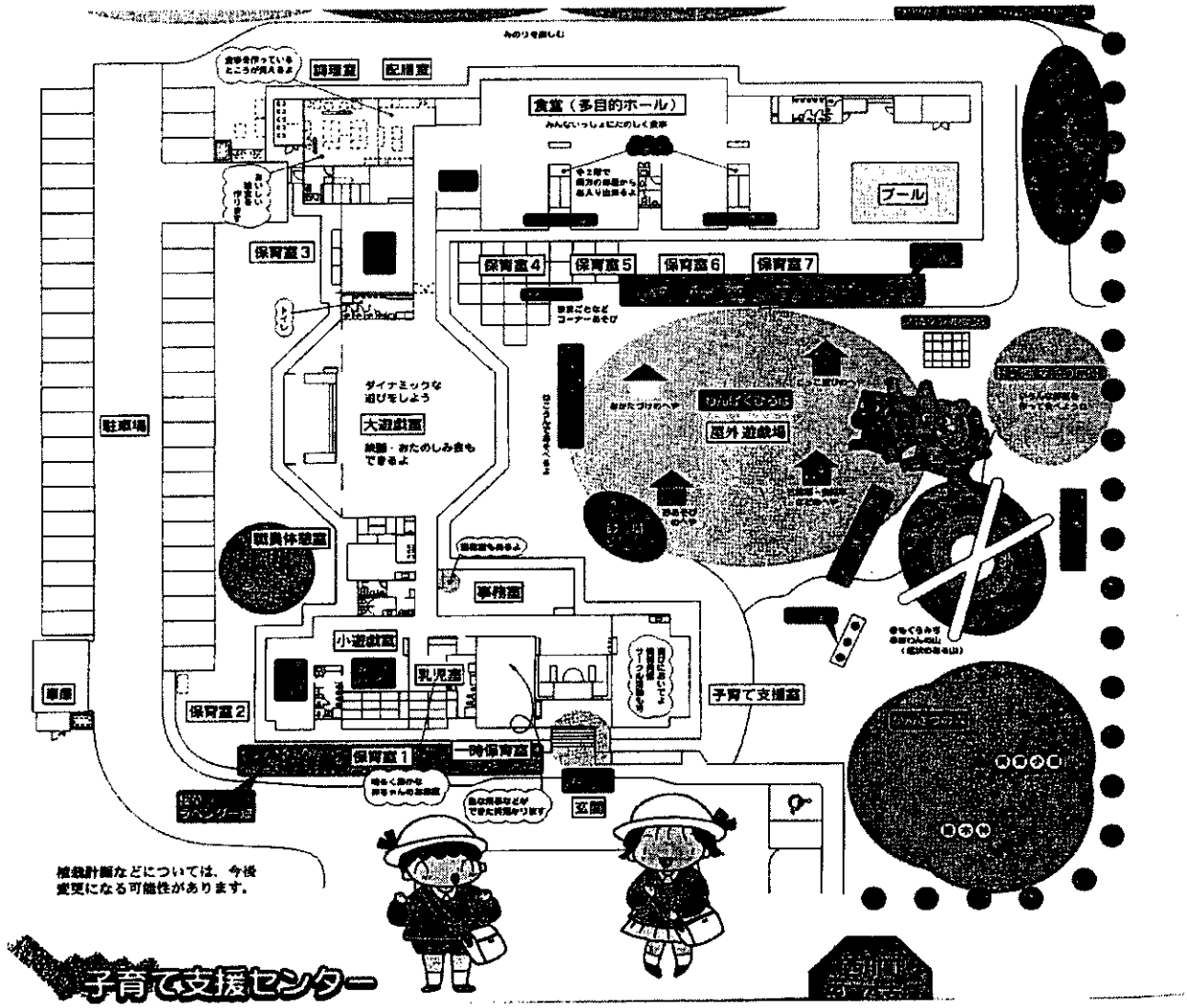
（1）地域

西川町には、かつて４つの保育園と３つの児童館が設置されており、児童館はへき地保育所も兼ねていたが、現在ではすべての児童館が休館しており、2001 年度には保育園が１園閉園して、３園に合計 151 名の子どもが在籍していた。この町では、0 歳児から 2 歳児までの入園率は非常に低いが、３歳児では過半数の子どもが入園し、４歳児、５歳児ではほぼ 100%の子どもが入園する。町内や近隣地域に幼稚園はなく、町立の保育園は就学前の重要な集団教育の場となっている。



先にも述べたように、2002 年度には、へき地保育園を１園除いてすべての保育園が統合され、町の大多数の幼児は町の中心部に新しく建設された町立にしかわ保育園に通園することになった。にしかわ保育園は、用地総面積 10328 ㎡に述べ床面積 174674 ㎡の園舎を有し、定員 170 名の収容力を持つ。この新しい保育園では、従来行われていなかった生後６か月からの乳児保育が実現され、また午前 7 時 30 分から午後６時までの保育時間を午後 7

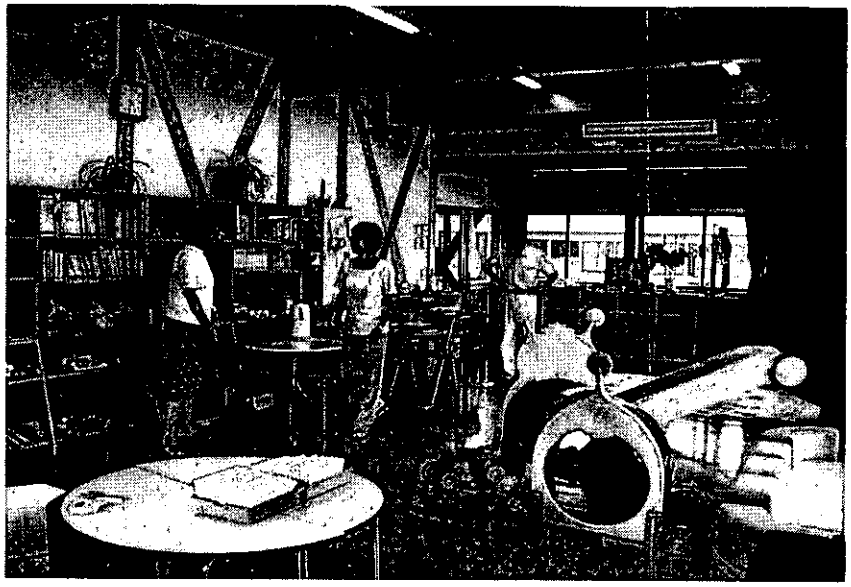
時に延長した。2002年8月現在では、生後9か月の子ども1名を含む151名の乳幼児が28人の職員によって保育されている。保育園の統廃合にあたり、それまでの職員はすべてこの新しいにしかわ保育園に移動となった。



さらに、保育園の一画には、子育て支援センターが併設されており、施設を開放しながら、育児講座をはじめ子育てに関する相談、情報提供などの支援の総合的な窓口となっている。このセンターは2002年4月22日に開所され、平日は月、水、木曜日の午前中は9時30分から11時30分、午後は3時から5時まで開いており、第1、3、5土曜日は午前中のみの9時30分から1 1時30分まで開いている。2002年8月までのところ、一日に平均10人程度の利用があり、午前中の利用者が多いという。午前10時にはおやつが出され、大人たちは備え付けのコーヒーなどでくつろぐ。時には外出するイベントも計画し、そのバスで出かけることもある。イベントのある日は利用者が多くなる。現在のところ、このようなイベントも含め、子育て支援センターの利用はすべて無料となっている。西川町全

体の子育て支援としては、保健センターを総合相談窓口とし、保育課、教育委員会等が連係、協働し、町民を巻き込んでの子育て環境の整備と支援システムの構築を目指した体制がとられている。

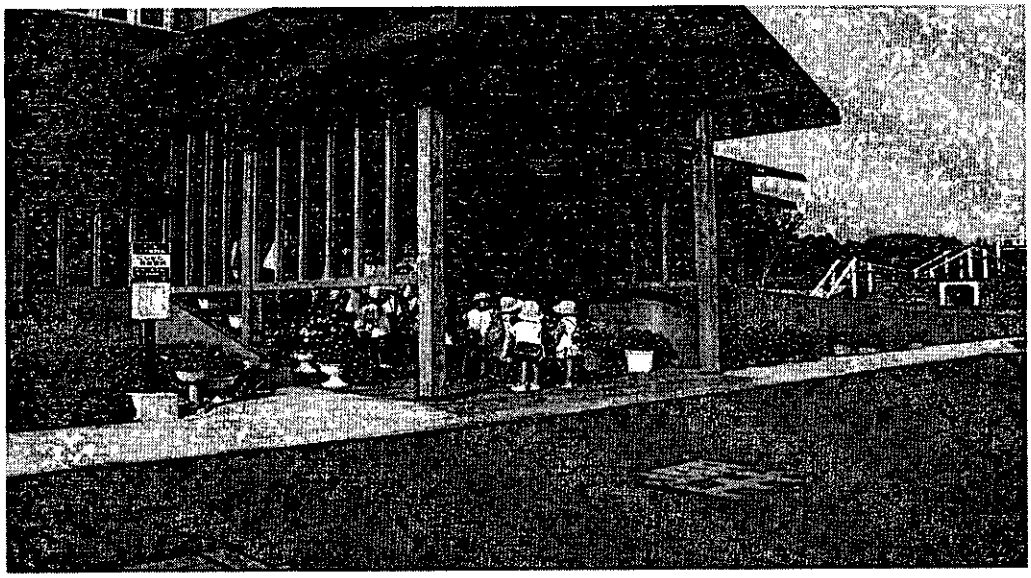
町役場に隣接する保健センターでは、子育てに関するサービスとして、母子保健サービス、母子福祉サービス、障害児等サービスを行っており、幼い子どもを持つ保護者の総合的な相談の窓口となっている。母子保健サービスとしては、母子手帳の交付をはじめとし、パパママ・マタニティスクール、孫育て学級、乳幼児検診、各種予防接種等々を実施しており、母子福祉サービスには主として乳幼児医療給付や児童手当、児童扶養手当、チャイルドシート助成がある。さらに、養育医療をはじめとした障害児や障害者のための様々な障害児等サービスがなされている。保健センター隣には西川町立病院があり、町民のための医療活動の拠点となっているが、たとえば耳鼻科などの子どもが比較的かかりやすい診療科目を受診するためには町外に足を運ばなければならず、保護者の不安の一つとなっている。



小学校、中学校はそれぞれ7校と3校であったが、2002年度には中学校の統廃合も実施され、中心部の中学校1校に統合され、名前も西川中学校に変更された。町営バスが中学3年生まで無料になり、生徒の通学の足となっている。中学校の統廃合にあたり、それぞれ学校によって異なっていた制服を統一したため、町は1人当たりの制服費用の半分まで（約7万円）を補助した。また、新しい校歌も制作された。小学校の統廃合についても近い将来には実現される可能性があるが、今後は町村合併を視野に入れながら、十分な検討と議論が必要となる。

先にも述べたように、保育園、中学校の統廃合実施に先立って、町は2000年4月1日より全部で8路線ある町営バスの料金を一律にし、大人の片道料金を 200 円にした。それ以

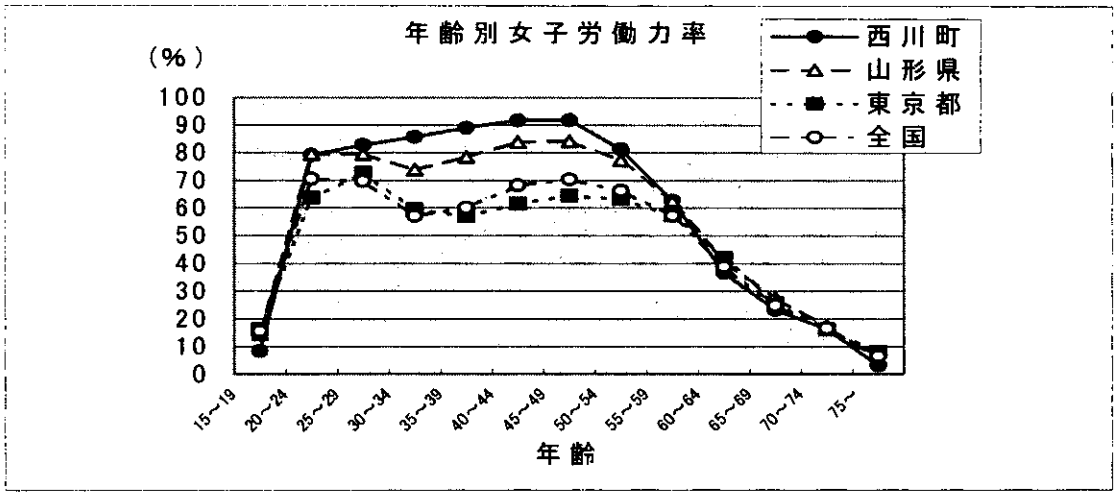
前には、初乗りは 130 円であったが、地域によって町の中心部まで出るのに片道 900 円かかることもあったことと比較すると、料金の面で非常に利用しやすくなったといえる。この一律 200 円は大人料金であり、子どもは中学校の統廃合を念頭に入れて、中学３年生まで無料とした。町営バスの一番の客は以前から保育園児であったが、子ども料金の無料化によってバス通園する園児が増加した。遠方から来る保育園児の場合、３ヶ月のバス代が以前ならば１万円近くかかっており、また、比較的近距離の子どもでも３ヶ月で 6000 円ほどかかっていたのがすべて無料になった。バス代は保育料とは別であるため、この無料化は保護者にとっては負担が軽減された。ただし、３歳以上の子どもは一人で町営バスに乗って通園してくるが、１～２歳児については保護者の送迎が必要となっている。新しいにしかわ保育園に町営バスで通園する子どもが増えたことによる混乱は４月初めには見られたが、現在では特に大きな混乱は見られない。時として、子どもが保育園から帰ってくるのを最寄のバス停留所で迎えることになっている保護者がいないということが起こることがある。その場合には、バスの運転士にその子どもを再び保育園に連れ帰ってもらうことになっている。幼い子どもを広域に渡る町の一箇所の保育園に統合することについて、保護者の不安は大きく、反対の声も聞かれたが、現在のところ子育て支援の機能も兼ねた新保育園は順調なスタートを切っているという。



（２）家族

図 2-1-2 に見るように、西川町の女子の労働力率は山形県、東京、全国と比べて高く、20 歳代後半から 30 歳代にかけて低下するM字型を描いていない。女性がよく働いていることが分かる。従来、女性の、特に嫁の大役は妊娠出産であり、その前後は野良仕事を始めとする労働力として働いてきた。高度経済成長期以後、西川町では食品工場や繊維工場が進出し、女性は収入を求めて家庭外に就労することが一般化してきた。働く場所は家庭内

やその周辺から家庭外へと変化したが、女性が働くことは社会進出というよりも、むしろごく日常といえる。また、配偶者の親との同居が圧倒的に多く、かつての伝統や地域の習慣に拘束された嫁姑の関係ではなくなりつつあるとしても、嫁が家庭外で働くことにより双方が緊張感から解放されやすい。また、同居することによって子育てへの援助が得やすい。



現実に、従来から祖父母は子夫婦家族との同居し、子育てに大きく関ってきたようである。伝統的には、嫁は子どもを出産するが、日常的な子育ては姑（子どもの祖父母）が主として担当してきた。そのため、世代が交代し、祖父母になって初めて子育ての主役になることも珍しくない。このような習慣は現在でも残っており、孫を育てることになって初めて、小さな赤ちゃんを沐浴させることになったという祖父母も少なくない。自分たちの子どもはやはりその姑や舅が育ててきたからである。しかしながら、町立の保育園で働く保育士の観察によれば、ここ 10 年ほどの間に、明らかに子育ての主役は子どもの親になり、祖父母はその脇役になりつつあるという。その背後には子育て観の違いや自分たちの子どもは自分たちの手で育てたいという親の側の意識の変化があると考えられる。

子育て主体の交代は見られるものの、現実に祖父母との同居が多いことから、祖父母の子どもへの役割や関わりは都市部と比べて依然として大きくなる。西川町の保健センターでは、母親学級の他に、そのような孫育てを担うことになった祖父母を対象に 1982 年に初孫学級を開き、翌年には孫育て学級と名称を変えて現在に至るまで継続されている。孫育て学級開講最盛期には、参加者は 50 人にのぼったが、現在では 10 人前後に減少しており、対象者を 1 歳未満の孫を持つ祖父母に拡大して実施している。孫育て学級を開くことになったきっかけの一つに祖父母の孫育てが一般的であることと、育てられる孫に虫歯が多く見られることが注目されたという経緯がある。祖父母が子育てについて学習し、孫に甘い物を与えすぎないように注意を喚起することも孫育て学級の目的の一つであった。

西川町子育て支援体制 ～子どもを育てる喜びや夢を分かちあえる町～

目的

① 子どもを持ちたい人も，持っている人も安心して出産や育児ができるように環境を整備します。
② 家庭における子育てを支援するために，町民が協力していくシステムを構築します。
③ 子育て支援の施策は，ひとりひとりの子どもの権利が最大限尊重されるようにします。

施策の基本

- 子育てと仕事の両立支援
- 家庭における子育て支援
- 子育てのための在宅及び生活環境の整備
- 子育ての経済的支援(子育てコストの軽減)

保健センター

★ 総合相談窓口　★ 子育て支援調整

○ 母子保健サービス
- 母子手帳交付
- パパマママタニティスクール
- 保育て学級
- 家庭訪問指導
- 乳幼児検診
  - ３～４ヶ月児健診
  - １１～１２ヶ月児健診
  - ３歳児健診
  - １歳６ヶ月児健診
  - ２歳児歯科検診
- 各種予防接種
- 神経芽細胞腫検査
- 妊婦健診受診券発行
- 健康相談
- その他
- ブックスタート

○ 母子福祉サービス
- 乳幼児医療給付
- 自動手当
- 自動扶養手当
- チャイルドシート助成

○ 障害児等サービス
- 養育医療
- 育成医療
- 小児慢性特定疾患
- 治療研究事業
- 特別児童扶養手当
- 障害児福祉手当
- 特別障害者手当
- ともしび会

子育て支援調整チーム （定期連絡会議）　虐待防止連絡協議会 （随時）

関係機関
★ 連携
（助言・指導）
- 児童相談所
- 保健所
- 福祉事務所
- 医療機関
- 警察

連携 ↔ 協働

保育課

総務課
★ 保育
- 乳幼児保育
- 延長保育
- 障害児保育
- 一時保育
- 保育相談
- 保育診断

子育て支援センター
★ 家庭における子育て支援
- 子育てサロン
- あそびの広場
- 育児相談
- 家庭教育学級
- ボランティア育成
- ファミリーサポート養成
- 情報　提供　発信
- サークル活動の拠点
- ブックスタート おはなし会

連携 ↔ 協働

教育委員会

生涯学習課
★ 地域づくり 人づくり
- 寄語りの会
- 少年少女自然塾
- 子ども会育成
- 中・高生を持つ親の会
- 青少年町民育成会議

学校課
★ 学童支援
- 就学児指導
- ことばの教室
- 放課後児童クラブ
- 要保護・準要保護児支援
- 育英奨学資金
- 学童保育

公民館
★ 地域づくり
★ 人づくり
- 地区活動

関係団体 ・ 自主組織

民生委員 主任児童委員	教育委員	保護者会 ＰＴＡ	子育て自主グループ	母親クラブ	子育てボランティア	障害児を持つ親の会	健康づくり推進員	その他

西川わんぱくプラン
町民・すこやかな自立する子ら

厚生労働科学研究費補助金（子ども家庭総合研究事業）
「インターネット及び人的ネットワークを活用した育児不安軽減に関する研究」
分担研究報告書

利用者の関心を反映可能なデータベース検索手法に関する検討

分担研究者　　三石 大（東北大学）

要旨

カウンセリング情報や Q&A などの育児支援のための知識ベースをネットワークを介して利用者に効果的に提供するためには，目的の情報を探すための検索が必要なとなる．しかしながら，知識ベースなどのデータは，その内容を単純な語句により説明することは極めて困難であり，既存のリレーショナルデータベース等の技術をそのまま利用していては，目的のデータを発見することは容易ではない．本稿では，このような知識ベースなど，複雑な特徴を有するデータからなるデータベースの効果的な検索のために，我々が開発を進めている，媒介変数を利用することにより個人の興味，関心，嗜好の分析をおこない，これをデータベースの検索結果に反映させることで，利用者が目的とするデータの発見を支援する手法について述べ，提案手法に基づくデータベースアプリケーションの構築と，これを利用した評価実験の結果を報告する．

1　はじめに

カウンセリング情報や Q&A など，育児支援ためのノウハウを知識ベースとしてアーカイブし，これを web などを介して提供するデータベースアプリケーションを構築できれば，一般の利用者が知識ベースにアクセスし，多様かつ高度な知識データを容易に参照することが可能となり，その意義は極めて大きい．現在，そのための様々な試みが実施されている．しかしながら，この様な web 上のデータベースアプリケーションにより，個人が大量のデータを参照できるようになる反面，一般の利用者が，大量に提供されるデータの中から目的とするデータを取得することは容易ではない．特に，知識ベースのように複雑な内容を持つデータは，その特徴を複数の明示的な語句の単純な組み合わせにより表現することが難しく，その結果，既存のリレーショナルデータベースや全文検索システムを利用し，目的とするデータを特定することは極めて困難である．

そこで我々は，このような複雑な特徴を持つデータを効果的に検索し，利用者が目的とするデータを効率的に発見できるために，利用者の興味や関心，嗜好などの感性を反映可能な検索手法の開発を行なった．これは，媒介変数を利用することにより個人の嗜好分析をおこない，これをデータベースの検索結果に反映させることで，利用者が目的とするデータの発見を支援するものである．本稿では，我々の提案する手法の詳細と併せて，web 上のデータベースアプリケーションによる知識ベースの 1 つとして料理のレシピ検索システムを例にとり，提案手法に基づく個人の嗜好を反映可能なオンラインレシピ検索システムの設計，実装，およびこれを利用した評価実験による有効性評価について報告する．

本稿は 5 章から構成される．1 章では先ず，大量のデータから効率的に目的のデータを検

索するための既存の検索手法の問題点を指摘し，我々の提案する媒介変数を用いた嗜好分析による個人の嗜好を反映可能な検索手法について述べる．次に，2 章では，3 章で提案した手法の応用として，個人の嗜好を検索結果に反映可能なレシピ検索システムの設計，実装を行なう．4 章では，実装したシステムによる評価実験を行い，提案手法の有効性を評価する．最後に，5 章で本稿のまとめを行なう．

2　個人の嗜好を反映可能な検索

本章では，個人の嗜好を反映可能な既存の検索手法を挙げ，その問題点を指摘するとともに，我々の提案する媒介変数を用いた嗜好分析による検索手法について述べる．

2.1　個人の嗜好を反映可能な既存検索手法

大量のデータベースから目的のデータを効率的に取得するための手法として，データの利用目的や個人の嗜好，感性に基づき，これを検索結果に反映させる検索手法は多い．
一般に感性検索と呼ばれる検索手法では，予め個々のデータの特徴を何らかの感性語句により表現し，これを検索のためのインデックスとして提供する[1][2][8][9][12]．
これにより，目的とするデータに対して利用者が抱く印象に基づきデータを検索することが可能となる．これらの感性検索では，予め特徴を示す語句となり得る感性語句を特定し，また，アンケート調査やデータの周波数解析など，何らかの方法でデータの特徴を分析し，想定された感性語句との対応付けを行なう必要がある．

Web アプリケーションとして提供されるデータベースアプリケーションの場合，その利用の容易性により各利用者の利用履歴が得やすいという利点がある．そこで，利用者のデータベースの利用履歴から個人の嗜好を推測し，これをデータのクラスタリングや検索結果の提示に利用する手法がある[5][6][7]．これにより，検索結果の提示における各個人の嗜好を反映した絞り込みや順序付け，関連性の高いデータの提示が可能となり，利用者は効率的に目的とするデータを取得することができる．
また我々は，これまで，複雑で曖昧な特徴を持つマルチメディアデータベースに対し，利用履歴をもとに検索のためのインデックスを半自動生成する手法を提案し，これによる検索システムの設計，実装を行ってきた[3][4][10][13]．これは，データベースの利用履歴から個人の嗜好を分析し，これをもとに，予め想定した感性語句等に関するデータの特徴を推測し，インデックスを生成するものである．これにより，データベース構築時には判っていなかったような，個々のデータの潜在的な特徴を推測し，これを検索に利用することが可能となり，複雑で曖昧な特徴を持つデータの中から目的とするデータの発見が容易となる．

しかし，これら利用履歴を利用する検索手法でも，データの特徴を示す語句となり得る語句，例えば印象を示す感性語句やデータに含まれている語句などを特定し，検索対象と関連付ける必要がある．

これに対し，知識ベースなど，明示的な語句により特徴を示すことが困難なデータも多